

村田和香 著

“私らしさ”を支えるための高齢期作業療法—10の戦略

齋藤佑樹（仙台青葉学院短期大学作業療法学）

本書は高齢期の作業療法に精通した村田和香氏が、25名の作業療法士とその担当した高齢者28名に対し行ったインタビューと観察記録をまとめ分析したものである。

本書のテーマは“臨床の知”である。臨床の知とは、直感と経験と類推から成り立つ知であり、仮説と演繹の推理と実証の反復から成り立つ“科学の知”と並び、臨床を支える上で重要な知である。科学の知は、抽象的な普遍性によって、分析的に因果律に従う現実にかかわり、それを操作的に対象化するが、対して臨床の知は、個々の状況を重視して深層の現実にかかわり、対象者が示す隠された意味を、相互交流的に読み取り捉える働きをするものである。それ故に臨床の知は一般化し、言語化することが難しいとされている。

作業療法士ならば誰もが経験する“対象者と向き合う上で大切にしていながらも的確に言語化できない”“学生や後輩に伝えたいがうまく伝えることができない”ことが、タイトルにもある“10の戦略”の名の下に言語化されている。

本書には事例も多数掲載されている。それは臨床場面の質感をも感じさせるリアリティにあふれるものであり、読み進める中で、過去に自分が経験した臨床の一場面を鮮明に思い出すことが何度もあった。それは、本書が臨床家と対象者の思考や相互交流を忠実に収集し、的確な言語でまとめあげているからなのだろう。自分の臨床を想起しながら、技を言語化・組織化していく作業はとても楽しいものである。

文中には“10の戦略”を用いる上で役立つ理論や

学説、評価法も多数紹介されている。多くの場合、まず理論や各論的な知識を学び、それらを臨床で適宜用いるというプロセスを経る。しかしこのプロセスは、複数の知識を臨床技術へと統合していくまでに多くの時間や迂回を要することが多い。一方で本書は、まず臨床の知に触れ、そこから“いま必要な”理論や各論的な知識へと適宜アクセスすることができる構成になっている。既存の理論書や各論書と相補的な関係の下に、臨床の質を支える一冊になるだろう。

作業療法は、単に心身機能の回復や技能の習得を支援する技術ではない。対象者が動機づけられ、生きるための術を身につけ、“自分らしく生きる”物語を更新し続けることができるよう、対象者の脇を伴走する、全人的で相互交流的な技術である。対象者一人ひとは唯一無二の存在である。決して定型化することができない臨床場面で、知や技を安定的に発揮し続けることは容易ではない。だからこそ臨床の知を言語化した本書には価値がある。

タイトルには高齢期とあるが、本書の内容は、領域や対象者のライフステージによって重要度と緊急度に違いはあっても、全ての領域で働く作業療法士にとって有意義なものである。経験を重ねた臨床家にとっては、自身の臨床技術を言語化・組織化する材料として、作業療法の多様性を学ぶ学生や、自らの知見を広げたいと考える若い作業療法士にとっては、これから学ぶべき知識を俯瞰する地図として、背中を押してくれる一冊になるであろう。

（A5判 頁176 2017年 定価3,400円＋税[ISBN978-4-260-03251-3] 医学書院刊）